



針先を球状に研磨する機械(内製)

さまざまな“針”を作って90年 医療分野に打って出る

有限会社 森田製針所

事業内容と沿革

こだわりのスウェーピング加工で 事業拡大

森田製針所は、家電用や医療機器用など、さまざまな用途の針を製造している。細いステンレス製のパイプや丸棒をスウェーピング(絞り)、曲げ、穴開け、溶接、切断、プレス、尖頭、研磨といった方法で加工する。なかでも、森田祐輔社長が「絶対負けれない」とこだわるのがスウェーピング加工。パイプ状や棒状の材料を叩くようにして細く伸ばす冷間鍛造の一種で、外形約0.3mmまでのパイプ加工が可能。スウェーピング加工をはじめとするさまざまな加工に使う機械や治具を社内で作るのが得意で、工場内には内製した特殊な機械が数十台と並んでいる。

創業は大正10年。森田社長の曾祖父が勤務していた大阪造幣局を辞める際、払い下げを受けた機械で金属加工を始めたのが始まり。当時は主にメリヤス針を製造していたが、繊維産業の競争力低下に伴い、祖父の代に他分野へと事業展開を進めた。森田社長は急逝した父の後を継ぎ、22歳の若さで四代目の社長に就任。祖父を慕うベテラン職人や父の築いた社外人脈にも支えられながら、事業を拡大してきた。

現在は家電用のイオン発生器に使われる放電針を主力とし、ほかに血液検査装置用の特殊な針や手術用具、半導体製造装置用のノズルなども製造している。

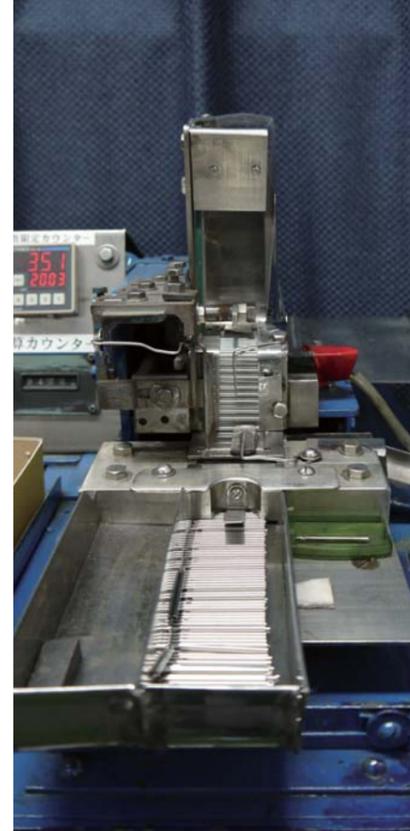
強み

買った機械で作れないモノが 当社に来る

さまざまな加工を社内で一貫する体制は、機械や治具、検査設備を内製できる技術力が支えている。例えば、イオン発生器用放電針の製造は砥石と温度センサーを組み合わせた独自の「尖頭機」を使い、熟練技術者が高精度に加工する。こうした専用機械は2-3か月の間に300万-500万円程度の資金で開発、製作できる。

外部に製作を依頼するのに比べて安価だけでなく、機械製作から加工まで社内ですべて完結できるため、品質や納期といった顧客ニーズにも柔軟に対応できる。コスト、品質、納期の総合力で顧客に評価されており、森田社長は「買った機械で作れないモノが当社に来る」と説明する。

本社工場内には旋盤、ボール盤、フライス盤などの汎用機械が置かれている場所があり、ここでベテラン社員を中心に機械や治具を製作している。ベテラン社員の機械製作の技術やノウハウを若手社員に受け継ぐことは課題でもある。そこで、ものづくりのセンスを磨き、モチベーションを高めるため、毎週金曜日の夕方は特別に時間を設け、80歳のベテラン社員を先生役にして若手社員に機械・治具の製作に取り組ませている。



針先の穴を検査する機械(内製)



機械を製作するのに使う汎用機



家電用や医療機器用など、さまざまな用途の針を製造している

内製する独自の設備を使い、
さまざまな用途の針を製造します



代表取締役社長
森田 祐輔さん

約90年にわたり、家電用から医療用までさまざまな針を作ってきました。内製する独自の設備を使い、スウェーピング(絞り)、曲げ、穴開け、溶接、切断、プレスまで、社内一貫対応することで、顧客の求めるコスト、品質、納期に柔軟に対応します。「用途に忠実なものづくり」を品質方針に掲げ、製品の用途をよく理解したうえで、製造と品質管理に取り組めます。自社を「図面の墓場にする」ことを目指し、難易度の高い加工技術に積極的に挑戦します。平成28年にクリーンルームを持つ新工場棟を建設し、医療分野の事業を拡大する計画です。

主な事業内容

針・ステンレスパイプ加工

主な取引先(納入先)

家電、医療機器、半導体製造装置などの各メーカー

【住 所】〒571-0034 大阪府門真市東町23-24
【T E L】06-6906-8686
【F A X】06-6909-5619
【創 業】大正10年7月 【設 立】昭和22年10月
【資本金】300万円 【従業員】42名

- 企画・提案
- 試作・受託
- 短納期対応
- 多品種少量
- 量産対応
- コスト相談
- オンラインワン
- 海外対応

カドマイスターの取り組み

うちを 図面の墓場にしろ

品質方針として掲げるのは“用途に忠実なものづくり”だ。森田社長は「自分たちが作る部品がどう使われるか理解すると、品質管理の意識が高まる」との考えを持ち、従業員を指導している。国際標準規格の取得にはこだわらないが、自社で検査装置や省力化した検査の仕組みを構築し、「顧客には必ず一度、工場を見に来てもらい、管理体制を納得してもらおう」と語る。

加工技術の追求にも強いこだわりを持ち、“うちを図面の墓場にしろ”と社員に声をかける。過去、なかなか不良率が下がらないスウェーピング加工の仕事を、社内の反対を押し切って受注したことがある。NC(数値制御)機やマイクロスコープなどの設備も導入し、試行錯誤の末に不良率を減らし、継続的な収益につなげた。「当時、スウェーピングで他社に負けると、将来、飯が食えなくなる」と考えたという。自社にとって重要な技術は時間がかかっても挑戦を続ける。そうすることで「技術レベルが上がり、良いモノが作れるようになる」という。

今後の展開

医療機器向けに期待、 新工場を建設

家電向けの放電針に並ぶ事業の柱として成長を期待するのは、医療分野。1ロットあたりの生産数はさほど大きくなく、部品の種類も多岐にわたる多品種少量の市場だが、景気の波には左右されにくく、小回りの利く生産体制が生かせる。現在、医療向けは売上高の10%強程度だが、2020年頃には50%まで伸ばしたい考えだ。

そのため、平成28年3月までに本社敷地内に新しい工場棟を建設する計画を進めている。数億円を投じて超音波洗浄機やマイクロスコープなどを新たに導入し、クリーンルームも新設する。医療分野で重視される品質管理体制を強化するため、より良い生産環境を作るのが大きな狙いだが、成長の目標を明確にすることで社員のモチベーションが高まることも期待する。医療分野に特化した部門を新設し、医療機器関係の展示会にも継続的に出展していく考え。長年培ってきた、ものづくりの力を生かして、新しい成長分野へと打って出る。

<http://moritahari.jp/>

